二〇二一年一一月六日

浦瀬戸にはや白波や冬初め　凡士

六地蔵みそなはしゐる菊花展　なつき

秋日落つ山羊くぐりくる長屋門　素秀

イヤホンを耳に無口や松手入　うつぎ

懸崖菊結界なせる寺の廊　うつぎ

菰巻の背ナに屋号の太き文字　かかし

光堂出でて梢の秋惜しむ　凡士

不揃ひの柿笊に盛る道の駅　かかし

一言にほぐるる心あたたかし　わかば

出番なき山車に風当つ菊日和　なつき

祝儀袋選ぶ愉しさ秋日和　こすもす

関取と女将の足袋と並べ干す　凡士

落暉いま炎となりし櫨紅葉　むべ

新藁を鋤きて農夫の鍬納め　かかし

ひび薬介護に暮れし日々想ふ　うつぎ

みほとりに病む人のあり暮れの秋　わかば

黄昏の空に溶けゆく薄紅葉　むべ

うら枯れの山腹に朱の大鳥居　愛正

毎週句会秀句・みのる選・二〇二一年一一月七日